

<古代キリスト教から中世、そして宗教改革。後期>

オリエンテーション

1. ゲルマン民族とキリスト教
2. キリスト教修道制
3. 中世キリスト教世界のダイナミズム
4. キリストと文化——スコラ的文化総合
5. 自然神学の諸問題
6. 研究発表（角元）
7. 研究発表（金）
8. 研究発表（長岡）
9. 研究発表（山本）
10. イスラームと12世紀ルネサンス
11. フィオーレのヨアキムと歴史神学 1/12
12. 宗教改革と近代世界 1/19

<前々回>キリストと文化——スコラ的文化総合(10/27)

(1) 宗教と文化

1. 「キリスト教と文化」の関係についての類型論（ヘルムート・R・ニーバー）
断絶・対立／中間（階層性、緊張、回心・変革）／連続性
2. スコラ的な文化総合、存在の大いなる連鎖（神から物まで） cf. 近代以降
階層的秩序：自然と超自然の区別と調和 → キリスト教世界の構造的安定性。
3. スコラ学（13世紀）
哲学（ギリシャ哲学）と神学：単純に区別できる関係ではない。相互連関・相互影響。
緊張関係。神の知としての神学、「聖なる教」（*sacra doctrina*、トマス）
4. 「自然の光のもとに知られうるもの」と「啓示の光において知られうるもの」。

(2) 中世の知的統一世界

5. 二つの書物、啓示神学と自然神学：神についての知識の獲得に関わる二つの道
6. 創造論 → 知恵思想
7. 類比（アナロギア）の論理：作品から作者への推論、存在のアナロギア（*analogia entis*）
8. 自然神学：世界の秩序の探求から神へ

(1)前提： 古代ギリシャの自然学と哲学的神学、旧約聖書の創造論と知恵思想
ヘレニズム的ユダヤ教：「無からの創造」の背景

(2)神の存在論証

(a)存在論的類型：アンセルムス、デカルト、ヘーゲル → 次回

(b)宇宙論的類型：トマス（5つの道）、ニュートン、人間原理

・経験的事実から神へ（因果律、目的論）

・運動・変化の存在／「原因—結果」の連鎖／第一原因

→これを神と呼ぶ

何が問題か？ 哲学者の神？

神の存在論証とは、その意図は？

9. 中世の統一的な知の世界（神の創造した合理性の客観化）

神学（啓示神学）／神学（自然神学）／哲学／自然学・諸科学

↓

- ・自然神学は知的世界の統合の要の位置にある。
- ・実在の構造／知識の構造／大学という制度的な構造

<前回>自然神学の諸問題(11/10)

A. 自然神学

自然神学(natural theology)は、啓示神学(revealed theology)と対をなす、キリスト教思想の伝統的なテーマである。一般に、啓示神学が神の啓示の書物である「聖書」を通じた神認識であるのに対して、自然神学は神の被造物(作品)としての「自然」を通じた、あるいは人間の自然の理性的能力による神認識と説明される。聖書と自然を神認識のための書物とする「二つの書物」説はその典型であり、また宇宙論的な神の存在論証は、自然神学の代表的な議論と言える。

自然神学の歴史・問題状況

自然神学の新しい可能性

【参考文献】

芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007

マクグラス『科学と宗教』(稲垣久和、小林高德、倉沢正則訳) 教文館、2003

B. アンセルムス

1. 『プロスロギオン』の第二章

If then that-*than-which-a-greater-cannot-be-thought* exists in the mind alone, this same that-*than-which-a-greater-cannot-be-thought* is that-*than-which-a-greater-ca-be-thought*. But this is obviously impossible. Therefore there is absolutely no doubt that something-*than-which-a-greater-cannot-be-thought* exists both in the mind and in reality.

2. (1) 「神」→聴く→理神論→intellectusの中に存在する

(2) intellectus にのみ存在するものよりも、同時に res の中にもあるものの方が偉大である

(3) 「これ以上偉大な者が考え得ない或る者」(=神)は理解の内にもみあるのではなく、レスの内にも実在する。

10. イスラームと12世紀ルネサンス

(1) 中世は暗黒時代ではない

1. 中世社会の変動と新しい宗教性の展開

- ・農業革命 → 都市の発展
- ・都市民衆の宗教性
- ・異端的民衆運動と教会の対応
 - 十字軍(アルビジョア十字軍) 新しい修道院運動(ドミニコ会、フランシスコ会)
 - 異端審問制度

2. 外的要因としてのイスラーム

(2) イスラームとキリスト教世界

313:キリスト教の公認

375:ゲルマン移動開始

395:東西ローマ帝国の分裂

476:西ローマ帝国の滅亡

529:アカデメイアの閉鎖、モンテ・カシーノ修道院の創設

622:ヘジラ元年(ムハンマド、メッカからメディナへ)

661:ウマイヤ朝

732:トゥールの戦い(カール大帝、サラセンを破る)

750:アッバース朝

- 962:神聖ローマ帝国の建設
- 969:ファーティマ朝
- 1037:セルジューク・トルコ
- 1096:十字軍の開始
- 1170:パリ大学創設
- 1204:第4回十字軍
- 1251:グラナダを残し、レコンキスタの完了
- 1258:アッバース朝滅亡

ウマイヤ朝のイベリア半島征服（アッバース朝に滅ぼされたウマイヤ王朝の王族がスペインに逃れる。アンダルシア王国。アンダルス：ムスリムの統治領域）
 コルドバ：711 征服、755 アブド・アッラフマーン到着、756 統治宣言
 トレド：712
 バルセロナ：713

3. 自然学、古代ギリシャからキリスト教世界へ

古代ギリシャの自然学（古代科学）→東ローマ帝国→ペルシャ帝国→イスラーム世界
 →中世ヨーロッパ世界（イベリア半島など。平和的共存と軍事的接触）
 12 世紀ルネサンス、13 世紀中世科学・スコラ：修道院から大学へ

4. 十字軍における軍事的接触とは別の経路・別の交流

イベリア半島における三宗教共存（寛容の文化）の一つの可能性
 哲学（アリストテレス）、科学（自然学）、建築、文学（11 世紀のイスラームにおける愛の伝統が、トゥルバドゥールの発生を刺激した。ロマンティック・ラブの成立（伊東、1993、227-270））の相互交流。
 レコンキスタによって終焉。

5. 「アンダルスは七〇〇年以上、アメリカ合衆国のざっと三倍にもおよぶ期間にわたってヨーロッパにイスラームが存在したことの、まごうことなき印である」（メルカル、6）
 「ヨーロッパ最後のイスラーム都市国家グラナダは、一四九二年に征服され、「モーロ人」はユダヤ人とともにスペインから追放されることになった」（7）

「相反するものの集合体という意味での文化の核心はまさに、アンダルスに存していた。だから、わたしたちは中心に地中海においてヨーロッパの地図を再構築し、アンダルスのまなざしを介してわたしたち自身の物語を語りはじめなくてはならない。深くアラブ化したユダヤ人がヘブライ語を再発見、いや、ふたたび創案したのはまさしくアンダルスにおいてであった。イスラームの統治下で生活するキリスト教徒ばかりか、イベリア半島における政治的支配を奪還したキリスト教徒までもが、哲学などの知の様式からモスクの建築様式にいたるまで、アラブの様式のあらゆる面を受容したのもまさにそこであった。アベラールやマイモニデスやアヴェロエスのように、揺るぎない信念の徒が、それぞれの信仰を横断して、哲学的、科学的、宗教的事実を追い求めるなかで、いかなる矛盾にも出会わなかったのもやはりそこであった」（8）

「コルドバの図書館は、学芸にかぎらず、社会全体の栄光を雄弁にものがたる重要な指標である。それはまさに、物質的な富と知的な財産とがちょうど交差する十字路のようなものだからである」（32）

「共存という社会実験」「征服後の社会では、キリスト教徒が主体となってムスリムとの

共存という社会実験が行われることになったのであり、これはヨーロッパ史上初めての試みであった。」(小澤、271)

6. ヨーロッパを移動する人々による知と文化の交流・伝達

聖地巡礼、移動する労働者(ギルド・職人、商人)、外交交渉、学生・説教者、マイノリティー(女性、ロマ、ユダヤ人)、

(3) 中世科学と12世紀ルネサンス

7. イスラーム科学：8世紀のアッバース革命、この王朝の下でのイスラーム科学(8世紀から15世紀)の黄金時代(8世紀から11世紀は西欧科学を圧倒、12世紀からラテン世界へ流入)、アラビア語による科学。イラン人、トルコ人、ユダヤ人など。

8. 12世紀ルネサンスの開始：大翻訳運動、アラビア語からラテン語へ

「十二世紀ルネサンスの知的回復運動の中心となったところはどこかと言えば、それは一貫してスペインとイタリアであった」「北東スペイン学派」「トレード学派」「北イタリア学派」(伊東、1978、220)

「北東スペイン学派」「カタロニア」「ピレネー山脈かエブロ河に至る」

「近代西欧科学の知的源泉をたどるならばほとんど、この中世ルネサンスの知的所産にゆきつく」(233)

「こうした「一二世紀ルネサンス」の結節点となったのが、イスラーム世界との接点の多いシチリアとスペインであった。シチリアとスペインの翻訳活動を通じ、西ヨーロッパにアリストテレス哲学、や新プラトン主義、自然科学の様々な知、イスラーム世界の知的伝統が紹介され、「一二世紀ルネサンス」と呼ばれる西ヨーロッパ世界の知的復興運動が生じたのである。」(関、151-152)

↓

13世紀以降の西欧中世の科学的発展

9. 「数学的合理性」+「実験的実証性」→ 近代科学

14世紀の運動論の二つの流れ：ガリレオの先取者たち

オックスフォード学派：ブラドワーディン、運動論の数学的・計算的問題

パリ学派：オレム、ビュリダン、運動そのものの基礎原理の解明=インペトゥス理論の展開

<参考文献>

1. クラウス・リーゼンフーバー『中世思想史』平凡社ライブラリー。
2. 小澤実他『辺境のダイナミズム』(ヨーロッパの中世3)岩波書店。
3. 関哲行『旅する人びと』(ヨーロッパの中世4)岩波書店。
4. マリア・ロサ・メノカル『寛容の文化 ムスリム、ユダヤ人、キリスト教徒の中世スペイン』名古屋大学出版会。
5. 伊東俊太郎『近代科学の源流』中央公論社、1978年。
『十二世紀ルネサンス 西欧世界へのアラビア文明の影響』岩波セミナーブックス、1993年。
6. C・S・ルーイス『愛とアレゴリー ヨーロッパ中世文学の伝統』筑摩書房。
7. 上尾信也『歴史としての音 ヨーロッパ中近世の音のコスモロジー』柏書房。